

4年1組

 4年1組が大切にしてきたもの
 ～心を一つにすること・失敗を乗り越えて～


心を一つにすることは大切なんだなと思いました

12月、音楽会に向けて進み始めました。子どもたちにとっては、初めてのクラス合奏と学年合唱。初めてのことに挑戦する子どもたちには、それぞれ思いがありました。「どうしても木琴に挑戦したい」「とにかく難しい楽器をやってみたい」など、最初は個人の目標を立てていました。しかし、合奏なのでそれぞれの楽器のできる人数は限られています。そこで、オーディションを行うことになりました。

リコーダーを使ってのオーディションです。子どもたちはオーディションのため、はりきってリコーダーの練習に挑んでいました。しかし、オーディションは「自分がしたい楽器をするために周りの友だちより上手になっている」必要がありました。そうでなければオーディションで選ばれなかったのです。そんな中、選ばれるために練習することはもちろんのこと、同じ楽器を希望している人たち同士で協力し合って練習に取り組む姿がありました。「間違えても大丈夫」「みんなでやればなんとかなるよ」「選ばれなくてもみんなでがんばっていこうね」など、お互いを思いやっていました。オーディションを行うことで、周りの友だちと気まづくなってしまうのかもしれないと、心配していた私の気持ちは全くなくなりました。むしろ、子どもたちのお互いを思いやる心信じ切れていなかった自分に気がつきました。子どもたちは子どもたちの内で、クラスで一つの演奏をつくることを誰よりも理解していたのだと感じました。

いざ、オーディション。子どもたちは朝から、オーディションのことばかりが話題にあがっていました。そして、お互いにかけて言葉が、どれもやわらかいものがありました。しかし、結果を伝えると空気は一変しました。どの子もオーディションに向けて頑張っていました、やはり結果は残酷です。涙を流すAさんの姿もありました。Aさんの手には、練習の形跡が見て取れる楽譜がありました。涙するAさんの姿を見て、選ばれたことの責任の重さを感じる様子もありました。そこから4年1組の合奏の歩みがスタートしていったと思います。

オーディションで楽器が決まりましたが、もう一つ決まったことがありました。それは指揮者です。「4年1組で大切にしてきた挑戦。音楽会で私は指揮者に挑戦したい。みんなを指揮でまとめていきたい」と、Bさんがクラスの前で語りました。子どもたちもBさんの挑戦を後押しします。「Bさん、みんなで一緒につくっていこうね」そんな声が溢れました。4年1組がつくる「心を一つにする合奏」の歩みが始まったように感じました。そこからは子どもたち自身の力で合奏をつくりあげていきました。Bさんをはじめ、子どもたちはお互いに感じたことを伝え合っていました。「もう合奏全体できたから、聞いている人を楽しませる何かをしたい」「このパートの音が後ろまで聞こえるか確認するね」など、一回の練習で、とても多くの改善点を伝え合う姿が見られました。

音楽会当日。私たちが演奏する合奏曲は「SING SING SING」。私たちはトップバッターなので、この曲はぴったりです。ですが、子どもたちはトップバッターだからなのか、とても緊張していました。緊張していたみんなの様子をみて、Cさんが



一言、言いました。「体育館に行く前に、みんなで円陣を組もう」。みんな賛同して、円陣を組みます。すると、子どもたちの雰囲気はガラッと変わりました。笑顔で笑い合っていました。子どもたちは緊張も、子どもたち同士の手で吹き飛ばしてしまいました。この日、私たちのステージでの演奏もそうですが、子どもたちは様々に思いをもっていました。既に、来年への目標を立てている子、上級生の演奏への憧れを抱いている子、頑張ってきた自分に対する前向きな言葉をもつ子。そうした子どもたちのふり返りの言葉を以下に紹介します。

- ・自分たちのクラスは全校合唱のあとだったので、ものすごく緊張しました。でも、音楽会で仲間との心が運動会より一層、心が一つになった気がしました。ぼくは、初めての合奏がこのクラスでよかったと思います。
- ・今日の音楽会で、5・6年生を見て、学級閉鎖で3日を失った6年生が、あんなに長くて難しい「威風堂々」を短時間でマスターしていたので、こういう6年生になれるか心配しています。でも、このクラスでは、もっといろんなことに挑戦できると思います。
- ・私は音楽会が大成功だったと感じました。どうしてかということ、みんな笑顔だったからです。どんなことがあっても、最後が笑顔だったら私はそれでいいと思います。一生懸命練習して、協力し合って、よく考えて、初めての合奏、合唱をしました。人は間違えないことがないし、たとえ失敗してもその失敗は次につながります。なので、4学年全員、音楽会は大成功だと思いました。
- ・そして当日の日、「そろうかな」と4年間の中で一番緊張していたけれど、ステージに立った時、「いつも通り心を一つにしてやれば成功する」と思ってやりました。そのおかげか、本番も練習みたいがいい合奏ができて、「心を一つにすること」は大切なんだなと思いました。

子どもたちのふり返りの言葉の端々に、これまで大切にしてきたことが述べられていました。この1年間での歩みを感じました。「心を一つにする」言葉では簡単に言えても、なかなか実感することは難しいです。そうした気持ちを子どもたちの力で感じられたことが大きな成長だと思っています。

私も一歩、高橋さんに近づけたと思いました

1年間、クラスの中核活動として行ってきた「竹とんぼの追究」。ずっと追究してくると、子どもたちの言葉が変容してきたことに気がつきました。「高橋さんは…」と口ずさむ子どもたちがとにかく多いのです。11月、国際竹とんぼ協会の会長である高橋さんにお会いしてから、子どもたちの内には、高橋さんという憧れの対象ができました。竹とんぼの追究の場面では、常に高橋さんがいたのだと思います。

そんな追究の時、私はDさんの姿に心を奪われました。Dさんは「また失敗、どうすれば飛ぶんだろう。みんなよく飛んでいてすごい」と、竹とんぼを作っては、「失敗」という感覚を実感していました。私は「失敗じゃないよ、いつか成功するから。また作ってみよう」と、声をかけることが多かったです。一月のある日、Dさんはまた、「これも失敗した。小刀で削ろうとしたら、削りすぎて変な形になっちゃった」と、私に伝えにきました。私も「あー、しょうがないね。また一からやろう」と声をかけると、「いや、この変な形からでもできるのか挑戦してみる」と言って、その形から竹とんぼづくりを始めていきました。いつもとは違う失敗だと感じたのでしょうか。「失敗」と言う声が明るかったのです。

Dさんが最終的に作ったのは、両翼が鍵のような形になっている竹とんぼ。私は内心、「また失敗って言うのかな。今度は一緒にやろうかな」と感じていました。いざ、飛ばすとき、Dさんは校庭に出ていきました。Dさんが竹とんぼを飛ばすと、風に乗って、空高く舞い上がりました。「めっちゃすごい飛んだ!成功した!」Dさんは満面の笑みで大きな声でそう言いながら、何度も飛ばしていました。そのエピソードをDさんは以下のように綴りました。

今日、作った竹とんぼを校庭でやったら、ものすごく飛びました。私は「失敗してもやり続ければ、けっさくができるんだな」と、すごくびっくりしました。空で飛ばしたら、学校の2階よりも高く飛んで、すごくうれしかったです。やり続けたかがあると思いました。私も一歩、高橋さんに近づけたと思いました。

子どもたちが一年を通じて追究した竹とんぼ。材の魅力を感じるとともに、「挑戦し続けたわたし」「失敗してもあきらめないこと」「あこがれに近づけた喜び」に気づいていった子どもたちの姿がありました。成功が一番、とは思いません。Dさんのように、「自分の理想に向けて歩み続けたこと」が何よりも大切だと思っています。だからこそ、最後の言葉は「成功して嬉しい」ではなく、「高橋さんに近づけた」というあこがれとの距離を捉え直しているのだと感じました。